

令和6年度 徳島県小学校教育研究会 研究主題

徳島県小学校教育研究会
事務局長 竹内 照記

1 研究主題

自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る
日本人の育成を目指す小学校教育の推進
－主体的・対話的で深い学びを通して 多様な他者と協働しながら
ともに学び続ける力を身に付けた子供の育成－

2 主題設定の理由

本県の研究主題「自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」は、価値観の違いや変化を前向きに受け止めながら、自らの力で未来を切り拓き、誰もが幸福と感じられる、豊かな社会を創り出すことのできる子供の育成を意図し、設定されたものである。

現代は予測困難な時代（VUCA）と言われ、近年の新型コロナウイルス感染症の世界的な拡大はまさにその象徴である。そのような我が国の現状や課題を踏まえ、令和5年6月16日に「教育振興基本計画」が閣議決定され、「持続可能な社会の創り手の育成」、「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」の2つのコンセプトが掲げられた。

「持続可能な社会の創り手の育成」については、学習指導要領の前文に、「これからの学校には、教育の目的及び目標の達成を目指しつつ、一人一人の児童が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値ある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。」と示されている。

「ウェルビーイング」については、身体的・精神的・社会的に良い状態にあることをいい、将来にわたる持続的な幸福を含む概念であると定義されている。学校で、教育活動全体を通じて向上させた子供たちのウェルビーイングが、家庭や地域社会へ広がり、さらに世代を超えて循環していく姿の実現が求められる。子供一人一人のウェルビーイングの向上が、持続可能な社会の創り手の育成につながるのである。

この2つのコンセプトは、今後我が国が目指すべき社会及び個人の在り様として重要な概念であり、これらの相互循環的な実現に向けた取組が進められるよう講じていく必要があるとされている。

これらのことから、学校においては、社会の持続的な発展と、個人と社会のウェルビーイングの相互循環を実現していくために、学び続ける人材の育成が一層必要であると考えられる。

徳島県小学校教育研究会は、学習指導要領の趣旨に基づき、平成29年度より「主体的・対話的で深い学び」による「学びの質の向上」に重点を置いた実践的な研究に取り組んできた。主体的に課題解決に向かう単元構想、見方・考え方を働かせる学習活動、他者との対話や協働による思考の深まりを意図した授業展開、個に応じた指導と支援、見通しと振り返りによる学びの自覚化、次の学びにつながる評価等、各部会において様々な研究成果を積み重ねてきた。さらに、「個別最適な学び」と、様々な考えが組み合わさりよりよい学びを生み出す「協働的な学び」の一体的な充実を図り、「主体的・対話的で深い学び」の実現を図る授業改革を推進してきた。

これらの取組のもと、ともに生きる共生社会の実現に向け、多様性を尊重することを学びながら、誰もが違いを乗り越え、生涯を通して学び続けてほしいと考え、副主題を「主体的・対話的で深い学びを通して 多様な他者と協働しながら ともに学び続ける力を身に付けた子供の育成」と設定した。

3 研究の視点

次の4つの視点に基づいて、研究に取り組んでいきたいと考える。

(1) 「主体的・対話的で深い学び」による学びの質の向上

次の3つの視点に立った授業改善を行い、質の高い学びを実現したい。①学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。②子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現で

きているか。③習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に想像したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか。

その際には、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の観点から学習活動の充実を図る。なかでも、多様な他者と協働することを意識した「協働的な学び」をより一層重視するものにしたい。さらには、これまで培われてきた成果とともに、ICTの新たな可能性を指導に生かすことで「主体的・対話的で深い学び」の質の向上につなげたい。

重要なことは、これまでも重視されてきた各教科等の学習活動が、子供たち一人一人の資質・能力の育成や生涯にわたる学びにつながる、意味のある学びとなるようにしていくことである。そのためには、教師が授業、単元や題材の流れを子供の「主体的・対話的で深い学び」の過程として捉え、子供たちが、習得した概念や思考力等を活用・発展させながら学習に取り組む中で資質・能力の活用と育成が繰り返されるような指導の創意工夫が求められる。

(2) カリキュラム・マネジメントによる教育活動の質の向上

学習指導要領には、「各学校においては、児童や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと、教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと、教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと（以下「カリキュラム・マネジメント」という。）に努めるものとする」とされている。

特に、「教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成」については、「言語能力、情報活用能力（情報モラルを含む。）、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力」と、「豊かな人生の実現や災害等を乗り越えて次代の社会を形成することに向けた現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力」を教科等横断的な視点で育成していくことができるよう教育課程の編成を図ることが求められている。

また、学習内容の教育課程全体における位置付けを確認し、内容の位置付けを縦の系統性と横の関連性で把握することにより、教える意義や配慮すべき事項、様々な工夫の着想が生みだされることが期待されている。

これらのことを踏まえ、カリキュラム・マネジメントによる教育活動の質の向上を図りたい。

(3) 指導と評価の一体化

学習評価は、子供の学習改善、教師の指導改善、カリキュラム・マネジメントを行う上で、極めて重要である。

特に、子供の学習改善においては、教師による評価の情報を、子供に確実に返したい。子供が主体的に学ぶためには、自分がこれまでどのように学び、何を学んだかという振り返りが重要になる。さらに、子供たちの資質・能力がどのように伸びているかを子供たち自身が把握できるようにしていくことも考えたい。その際、子供が学習したことの意義や価値を実感できるようにしたい。それによって学びが習慣化され、生涯にわたって能動的に学び続ける力が育成されていく。

また、教師の指導改善においては、子供一人一人の学習の成立を促すための評価という視点を一層重視したい。つまり、教師が「子供にどのような力が身に付いたか」という学習の成果を的確に捉え、「指導と評価の一体化」の実現を図り、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を図るとともに、カリキュラム・マネジメントにも生かしたい。

(4) 教職員の資質・能力の向上

私たち教職員には、教職に対する強い情熱、教育専門職としての確かな力量、そして総合的な人間力等、多くの資質・能力が求められる。目の前の子供への深い愛情を基盤に、絶えず学び続け自分を高めていくことのできる教職員でありたい。

現在、GIGAスクール構想による1人1台端末の整備後における情報教育の推進、とりわけ教師のICT活用能力の向上、さらには、働き方改革や教育技術の伝承等が喫緊の課題となっている。各学校や各部会で行われている研究が、教職員の資質・能力の向上や学校の教育活動の充実につながっているかどうかを問い直し、より効果的で充実した研究の在り方を模索することが必要である。

本研究会は、これまで本県小学校教育の向上と教職員自身の力量形成を目指して取り組んできた。時代は変われども、組織や各部会の教育実践の蓄積をその時に応じた方法で発展させ、互いの実践や意見を進んで研究会の場に出し合い、切磋琢磨することで、優れた指導方法等を開発・共有して子供たちのウェルビーイングの向上に貢献していきたい。